



マルコ・ポーロ

東方見聞録

著者略歴

青木富太郎（あおきとみたろう）

1908年 東京に生る

1933年 東京大学文学部東洋史学科卒

《現在》 高知大学文理学部長

《著書》 「蒙古の民族と歴史」「東洋学の成立
とその発展」「マルコ・ポーロ」

《現住所》 高知市小津町 10—6

〈お願い〉

☆ご愛読ありがとうございました。小社ではみなさまの声を参考に、より良い本を作るよう努力しておりますので、本書の読後感をお聞かせくだされば幸いです。また内容や造本についても、お気づきの点がありましたらご指摘ください。

☆現代教養文庫の定価は、すべてカバーに明記してあります。

☆万一、落丁乱丁の場合は、直接小社にお送りくだされば早速お取替します。

現代教育文庫 656 東方見聞録

© 1969

昭和44年4月30日 初版第1刷発行

訳 者 青木富太郎

発行者 二宮敏夫

発行所 株式会社 社会思想社

(101) 東京都千代田区神田駿河台3—5

電話代表 (03) 292—2611

振替 東京 71812

文弘社印刷・黒田製本

文庫

東 方 見 聞 録

青木富太郎 訳

社会思想社刊

東方見聞錄

目次

序 説

第一章 小アルメニアから上都開平府のフビライ・ハーンの宮廷にいたる

旅行中に見聞した諸國のこと

三

九

1	アルメニア	三
2	ジョルジアとその王	三
3	バクダード	三
4	タブリーズ	三
5	ベルシア	三
6	キルマン王国	三
7	カマディ市、カラオナスの盜賊	三
8	ホルムズ市	三
9	コビナン市と大沙漠	三
10	山の老人	三
11	バルフ	三
12	バダフシャン	三
13	カシユガル王国	三
14	サマルカンド市	三
15	天山南路のオアシス都市	三
16	タングート地方	四
17	カムル	四
18	チンギンタラス	四
19	肅州と甘州	五
20	ハラホルム	五
21	チンギス・ハーン	五
22	タタール人の風習	五
23	タタール人の神	五
24	タタール人の戦闘ぶり	五
25	タタール人の裁判	五
26	ハラホルム北方の曠野	五
27	涼州・寧夏	五
28	テンドウク	五
29	チャガン・ノール	五
30	上都	五

第二章 フビライ・ハーン、その宮廷と首都

.....セ

1	フビライ・ハーン	三
2	ナヤンの乱	三
3	将士に対する恩賞	七
4	大ハーンと王子	九
5	大ハーンの官殿	一〇
6	ハンバリク市(一)	一三
7	親衛軍	一五
8	官中の大饗宴	一六
9	大ハーンの誕生日の祝い	一六
10	新年の祝賀	一六
11	大ハーンの狩獵	一六
12	大ハーンの一年の行事	一七
13	ハンバリク市(二)	一五
14	アフマットの暴虐	一六
15	紙幣	一六
16	政務をみる十二人の貴族	一〇〇
17	駅伝制度	一〇〇
18	救恤事業	一〇一
19	公道の並樹	一〇三
20	カタイの酒、燃える石	一〇三
21	飢饉対策	一〇四
22	大ハーンの慈善事業	一〇四
23	ハンバリクの天文家	一〇四
24	カタイ人の宗教、風習	一〇六

第三章 カタイの西部および西南部への旅一九

1	ブリサンギン川	一〇
2	ジュジュ	一〇
3	太原府	二〇
4	カイチュの城砦	二二
5	黄河と河中府	二三
6	京兆府	二四
7	クンカン地方	二五
8	成都	二五

9	チベット地方	二六
10	印都	二九
11	カラジャン	三〇
12	ザルダン地方	三三
13	ビルマ	三六

14	ベンガル	三九
15	カウジグ	三〇
16	アニンとソロマン	三〇
17	貴州	三三

第四章 カタイの南部とマンジへの旅

..... 一三三

1	河間府と滄州	一三四
2	チナリとタディンフ	一三四
3	リンジュと邳州	一三五
4	カラモレン	一三六
5	マンジの征服	一三六
6	淮安・宝応・高郵	一三九
7	泰州・通州・揚州	一三九
8	安慶と襄陽府	一四〇

9	真州と楊子江	一四二
10	瓜州	一四二
11	鎮江府と常州	一四四
12	蘇州	一四四
13	全マンジの首都キンサイ	一四四
14	タンビジュ	一五九
15	福州	一五九
16	ザイトン	一六〇

第五章 日本、南海諸島、南インド、インド洋の沿岸及び諸島

..... 一六三

1	マンジの商船とインド洋で使用される船	一六四
2	チバング島	一六六
3	チャンパの国	一七〇
4	ジャヴァ島	一七一
5	マライ半島地方	一七三
6	小ジャヴァ島	一七三

7	セイラン島	一七七
8	マアバル地方	一八〇
9	ムトフイリ国	一八六
10	ラル地方	一九一
11	カイルの町	一九四
12	コイルム王国とコマリ地方	一九五
13	エリ王国	一九七
14	メリバル王国	一九七
15	ゴジエラト王国	一九八
16	タナ王国	一九九
17	カムバエトとセメナート	二〇〇

18	ケスマコラン王国	二〇〇
19	男島と女島	二〇一
20	スコトラ島	二〇三
21	マデイガスカル島	二〇三
22	ザンジバル島	二〇四
23	アバシユ地方	二〇六
24	アデン	二〇八
25	エシエル市	二〇九
26	デュファアル市	二一〇
27	カラトゥ市	二一〇
28	ホルムズ市	二一一

の君主の間の戦争と北方諸国のこと……………二三

4	アルゴンとニ	二二
5	アルゴン、	二二
6	カサン、ハ、	二二
	イドゥ	二四
	ライとの戦争	二五
	の武勇	二七
	マットの争い	三八
	ンとなる	三二
	となる	三三

7	極北地方の王コンチ	三四
8	暗黒な地方	三六
9	ロシアとキプチャーク・ハーン	三八
10	フラグとバルカの戦い	三九
11	トクタイとノガイの戦い	三九
12	結末	三二

序

說

マルコ・ポーロの父ニコロとその弟マフェオの二人が商品をたずさえて、ヴェニスからコンスタンチノープルに到着したのは一二六〇年であった。二人は賢明な人物だったので、黒海をこえて商売に出かけようと相談し、宝石類を買いこみ、ここから海をこえ、ソルダイア〔クリミヤ半島南端〕にむかった。

ソルダイア滞在中に、もっと先へ行った方がよいと考え、ここを出発し、タタール人〔本書にいうタタール人とは蒙古人のこと〕の王バルカ・ハーン〔キプチャク・ハーンのベルケ〕の宮廷におもむいた。彼はサライやブルガルにすみ、タタール人中、もっとも自由主義的な君主とされていた。二人の到着を歓迎し、彼らも持参した宝石すべてをおくった。バルカも非常に満足し、少なくとも価格の二倍をあたえた。一年間この宮廷に滞在したが、そのとき、バルカとレバントの王フラグ〔初代イル・ハーン〕との間に大戦争がおこり、互いに多くの兵士が殺され、結局バルカの敗北となった。

この戦争のため、捕虜となる危険をおかさぬかぎり、きた道を帰ることはできなくなったが、先へ進むには故障はなかったので、ブルガルを出発し、バルカの国のはずれにある町ウカカへ行き、ティグリス河〔ヴォルガ河〕を渡り、砂漠をこえた。この砂漠の横断には十七日もかかり、その間、町も村もなく、ただタタール人が家畜の群をつれ、テントをはっているのを見ただけであった。

砂漠をすぎて立派な大都市ブハラについた。ボラクという王の所領たる同名の州にある。ペルシア全土でもっともよい町である。ここで進むことも帰ることもできなくなり、三年間滞在した。

滞在中にレバントの王フラグから世界中のタタール人の王、大ハーンの宮廷に行く使節一行がここについた。一行は故国でラテン人を見たことがなかったので、兄弟に興味を感じ、「もし相談にのれば、名誉も利益もえられるのだが」ときりだした。一体何の話かとたずねたところ、「実は大ハーンはラテン人を見たことがない。だから我々とともに彼の宮殿にゆけば、あなた方を見て非常によるこび、大きな名誉と恩賜の品々を下さることは期待してよいし、一しょに行けば旅行は安全だ」といった。

そこで兄弟は準備をととのえ、使節とともに出発し、一年間の旅行をした。道ははじめ北に向かい、ついに大ハーンの宮廷についた。途中、種々さまざまな驚くべきことを見たが、同じものを見たマルコ・ポーロが本書のあとの方ですべて話すから、ここではふれない。

宮廷につくと、大ハーンは大いに優遇し、かずかずの質問をあげせた。まずヨーロッパの皇帝、王、諸侯、権力者たちの品位をたもつ方法、領内で行なう裁判の方法、軍事行動などをたずね、またローマ法王や教会、ローマでなされているすべてのこと、ラテン人の習慣についてもきいた。兄弟は知識が豊富だったので、順序正しく、事こまかに事実をものがたった。すでにタタール語を十分に話せたので、こんなことができたのである。

序 説
皇帝の名はフビライ・ハーンといい、あまねく地上にひろがっているタタール人の君主であり、広大な国土と所領をもつ君主であるが、ラテン人のことをいろいろ聞いて非常によるこび、法王のもとへ使節として彼らをつかわそうと考えついた。彼は一人の貴族をつれていってくれとたのみ、彼らもよろこんで御命令をうけますと答えた。こうして貴族コガタルが御前によびだされ、

兄弟とともにローマ法王のもとへ行けと命ぜられた。

大ハーンはタートル語で法王あての書翰をかせ、これを兄弟とコガタルにもたせ、さらに口頭で申し伝うべきことを彼らに託した。手紙の内容は、「キリスト教の教理に精通した百名の人を派遣してもらいたい。その人たちは七つの学芸に精通し、大ハーンの領土内にいる学者たちに、公明正大な論議で、キリスト教の信仰が、他のいかなる信仰よりもすぐれ、しかも明白な真理の上に立つものであり、タートル人の神々や、家庭で礼拝される偶像は悪霊以外の何ものでもなく、これらを神として信仰するのはあやまりだ、と説明できるだけの人物がほしい」というのである。そして最後に、大ハーンはエルサレムにあるキリストの墓の前にもえている灯火の油を少しもち帰るよう命じた。

任務をさすけおわって大ハーンは、彼らに金牌を与えよと命じた。この牌面には、三人の使節が旅行の途中、どこでも馬なり、護衛なり、要するに必要な品は何でも供給される権利のあることがしるされている。準備がおわって、三人は大ハーンに別れをつけて出発した。

何日後か知らないが、旅行の途中、コガタルは病気にかかり、馬にのれなくなり、ある町に滞在した。兄弟は使命遂行のためには彼をのこして出発すべきだと判断し、病人もこれに同意したので、二人だけで旅をつづけた。彼らはどこでも必要品を十分に供給されたが、これも大ハーンから賜わった金牌のおかげであった。

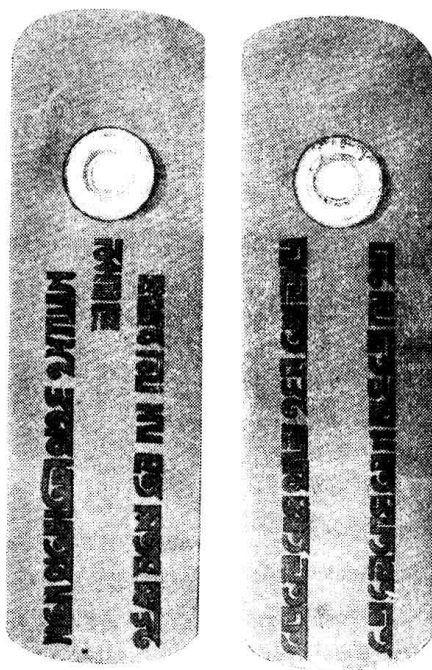
三年ほどかかってアルメニアのラヤス（今のアイアス）に到着したが、これほど長くかかったのは、雪にふられたり、大雨にあったり、のりこえられぬ障害にぶつかったりして、ときどき長逗

留したからである。

ラヤスからアークルについたのは一二六九年四月で、ここで法王クレメント四世の逝去を知った。やむなく賢明の評判の高いエジプト駐在の法王の全權使節ビアケンツァのテオバルドのもとに行き、託された使命の話をした。彼はこの話を全キリスト教徒にとって名譽な、しかも有利なことだと考え、新法王のえらばれるまで待て、といった。彼らもこれに賛成し、法王の選挙のおわるまでの期間を利用してヴェニスに帰り、家族にもあいたいとのべて、アークルをたち、ネグ

ロポンドをへてヴェニスにもどった。

ついで見ると、ニコロの妻はなくなっており、十五歳の息子マルコがのこされていた。これが本書の主人公である。兄弟はヴェニスで二年間も新法王の選出をまったが、えらばれないので、大ハーンのもとへ帰るのをこれ以上まてぬと考えた。そこでマルコをつれて出発し、アークルにゆき、前にのべた全權使



蒙古帝国の金牌（東シベリア出土）

節とあった。使命について話しあったのち、エルサレムに行き、キリストの墓の前の灯火の油を少しもってくる許可を全権にもとめ、ころよく許された。エルサレムでこの油を手に入れ、再びアークルに帰り、全権から大ハーンあての「兄弟は忠実に使命の達成につとめたが、あいにく法王がいないので遂行できなかった」という趣旨の手紙をもらった。

かくて三人はアークルからラヤスに行ったが、ここで全権使節が法王にえらばれ、グレゴリー十世になったことを知った。新法王は彼らをアークルによびもどした。伝道団からえらばれた二人の僧が兄弟とともに大ハーンのもとに行くことを命ぜられた。二人の僧は当時この地方にいた学識のある牧師で、一人はヴィケンザのニコラス、他はトリポリのウイリアムといった。法王は二人に正式の信任状と大ハーンへの返書をあたえ、司祭・僧正を任命し、また法王と同じように罪をゆるす資格などを与え、大ハーンへの贈物として多くの水晶の器を委託した。こうして一行は法王の祝福をうけてアークルを出発した。

ラヤスについたとき、バビロニア（当時エジプトをバビロニアといった）のスルタン、フンドクダルが大軍をひきいてアルメニアに侵入し、各地を荒しまわっているとの報道をきいた。僧侶たちは全くふるえあがり、信任状も手紙もニコロとマフェオにわたし、御堂武士団の人々とひきかえしてしまった。

マルコをつれたポーロ家の兄弟は、夏も冬もあるきつづけ、ついに大ハーンのもとについた。彼は開平府（上都）とよばれる富裕な都市に滞在していた。この旅は悪天候と酷寒のため、三年半もかかった。大ハーンはニコロとマフェオが帰ってくるときいて、四十日行程もさきへ人をや

って、出迎えさせた。

彼らは開平府につくなり、ただちに宮廷に伺候したが、大ハーンは多くの貴族をしたがえて待ちかまえていた。彼らが三拝九拝の礼をすると、大ハーンは立ち上がらせ、歓迎の言葉をのべ、道中は無事であったか、健康はどうだったかとたずねた。彼らはローマ法王から託された信任状と贈物、キリストの墓前の油を捧呈した。大ハーンは油を近くの倉におさめさせたのち、すでに立派な青年になっていたマルコに目をつけ、あれは誰か、とたずねた。「陛下、あれは私の息子でございます」とニコロが答えた。「よく来た」と大ハーンは叫んだ。宮廷では彼らの帰還が祝われ、他の貴族とともに宮廷に滞在することになった。

マルコ・ポーロは短期間にタタール人の習慣や言語、戦闘方法をのみこみ、タタール語のよみ書きのほか、諸国語を話し、四ヶ国語を書くことができるようになった。彼は何事にも慎重だったから、大ハーンも高く評価していたが、才能もあり、実務の腕もたしかだと知ると、片道六ヶ月もかかる遠い地方に派遣した。彼は慎重に手ぎわよく任務を遂行してきた。使者が各地から帰ってきて、さづけられた任務のことだけしか話せないようだ、フビライ皇帝はきまって「用むきについての報告よりも、お前の見てきた各地のめずらしいものや状況などをきく方がよっぽどましだ」というのを、彼はすでに知っていた。大ハーンは未知の国々の話をきくのが好きだったのである。そこでマルコは往復の途中、非常な苦心をして、訪れた国々のいろいろなことを、すべて大ハーンに話せるように集めた。

都に帰ると、さっそく御前にまかりでて、使命について報告し、つづいて気持のよい聡明な態